

民族舞踊文化



No.12

2000年5月15日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F
TEL 03-3583-3633(代) FAX 03-3583-3639



中国'99昆明世界園芸博覧会ジャパンディ開会式

1999年の アジア民族舞踊交流

財団法人 黛民族舞踊文化財団

理事長 犬丸 直

新しいミレニアムの到来を間近にひかえた1999年は、中国では、おめでたい数字の9が重なる特別に慶賀すべき年とされているようです。この年に黛民族舞踊文化財団は、中国の民族舞踊との交流の事業の二つに参加することができました。

まず、6月23日から7月2日まで、王恵芬先生を団長とする中国雲南省舞蹈家協会第8次訪日代表団一行7名の方々が来日されて、群馬県新田町、東京（目白、池袋）、大和市、松本市などで民族舞踊交流の催しを行ないました。このたびは、黛民族舞踊団や地元の民族芸能の方々のほかに、韓国から鄭明子舞踊団の御参加をいただいたので、“アジア”民族舞踊交流会となりました。

いつものように、公開レッスン、舞踊交流会、研究会、シンポジウムなど盛りだくさんな日程をこなし、多くの人々に感銘を与え、相互理解の実をあげました。私も一行が日本を去られる直前の7月2日夜、赤坂飯店でのお別れの

パーティーに出席し、団員の皆様と歓談し、思い出深いひとときを過ごしました。

もうひとつの大きなイベントは、中国雲南省昆明市で開催されたEXPO'99世界園芸博覧会の、ジャパンディの行事記念公演に参加したことです。7月17日から22日にかけて訪中した黛民族舞踊団は、琉球舞踊の川田功子の会などと共に、この世界博の特別イベントに華をそえとともに、旧知の中国の民族舞踊界の人々と、交歓し友好の絆をふかめてまいりました。

きたる2000年の7月には、世界民族芸能祭が、東京を中心として日本で開催されます。民族舞踊の振興に生涯をささげられた故黛節子先生の衣鉢を継ぐこの財団に対する各方面よりの御支援、御指導を切望すると共に、この世界民族芸能祭（ワールド・フォークロリアーダ）へも、その成功のための御協力を、心よりお願いいたします。

雲南省舞蹈家協会第八次訪日代表团 アジア民族舞踊交流会

1999年6月23日（水）～7月3日（土）



左より大野常務理事、犬丸理事長、訪日代表团王恵芬団長



交流公演のフィナーレ

【訪日代表团メンバー】

団 長	：	王 恵 芬	女性（漢族）	雲南省舞蹈家協会常務理事
団 員	：	陳 明 玉	女性（哈尼族）	玉溪市花灯劇団演出家
〃		楊 軍	女性（漢族）	雲南芸術学院舞蹈学部 理論教育研究室主任副教授
〃		鄧 輝	男性（漢族）	雲南省舞蹈家協会常務理事
〃		和 文 華	男性（納西族）	迪慶州歌舞団演出家
〃		姚 正 坤	男性（哈尼族）	墨江県民族歌舞団演出家
〃		蔣 曉 梅	女性（漢族）	雲南芸術学院附属中学校講師

《民族舞踊交流会スケジュール》

1999年

6月25日（金）14:00	公開レッスン	群馬県新田町文化会館エアリスホール
26日（土）14:00	舞踊交流会	群馬県新田町文化会館エアリスホール
27日（日）14:00	東アジア舞踊の 研究会・シンポジウム	学習院創立百周年記念会館（目白）
16:00	舞踊交流会	学習院創立百周年記念会館（目白）
28日（月）18:30	舞踊交流会	東京芸術劇場小ホール1（池袋）
29日（火）18:30	舞踊交流会	東京芸術劇場小ホール1（池袋）
30日（水）18:30	舞踊交流会	大和市立保健福祉センター
7月1日（木）18:30	舞踊交流会	松本市林友渚カナディアンホール
出 演	中国雲南省舞蹈家協会訪日代表团・鄭明子韓国舞踊団・黛民族舞踊団	

民族舞踊交流会記録

6月23日（水）

中国雲南省舞蹈家協会第八次訪日代表团王惠芬団長以下一行7名は15時07分着C A 922便にて定時より早く成田空港に到着。リムジンバスで東京シティーに向かう。新装なった都市センターホテルにチェックインして、翌日以降のスケジュールに従って荷物の再分配をする。

午後7時から都市センター内の洋食店「アイリス」で当財団の大野常務理事、国立文化財研究所芸能部長の星野紘先生、黛民族舞踊団のスタッフ全員とで王団長以下7名の来日歓迎パーティーを開く。訪日代表団のメンバーは翌朝の予定が早いいため、皆早めに各自の部屋に入る。



「伊雑宮御田植祭」三重県磯部町

6月24日（木）

日本に着いた第一夜は皆よく眠れたとの事。最初に稲作民俗行事の取材から始める。王団長以下7名と国立文化財研究所芸能部長の星野紘氏とお知り合いの方、黛民族舞踊文化財団の大野常務理事、黛莉香、藤原明人、通訳の洪恵明の4名、都合13名は東京駅6時50分発の新幹線で名古屋へ。近鉄特急で10時43分に三重県の鳥羽磯部駅に到着。磯部町の西井一衛町長、宮出穂積教育長その他の方々の出迎えをうけ、2台の車に分乗して伊勢志摩国立公園内の磯部・伊雑宮に向かった。ここで日本三大御田植祭の一つ伊雑宮御田植祭の取材を行う。

一行が到着したときは丁度竹取神事が始まったばかりで、御料田に立てられた忌竹を裸男たちが泥だらけになって奪い合っているところであった。続いて御田植、踊込み等数々の神事が催され、その合間にこれらの神事の語り部でもある磯部町文化協会の古市鑄造会長から貴重なお話を伺った。神事が終了した後、昼食をいただき、ドブロックなどをふるまわれ、地元の方からあたたかいもてなしをうけた。午後からは伊雑宮の本殿に参拝し、この神社の由来や、伊勢神宮との関係、また20年ごとの本殿の遷宮等についての説明を聞いた。帰りぎわに突然近くに住む人から歓迎の申し出があり、一行はその方の家にお邪魔して茶菓子の接待を受けた。ここでは訪日代表団の一行も打ち解けて日中両国の風俗、習慣の共通点や相違点などを磯部町の人たちと忌憚なく話し合った。一行は後ろ髪をひかれる思いで15時51分発名古屋行きの近鉄特急に乗り帰路を急いだ。新幹線の東京駅着は20時14分、ハードスケジュールにもかかわらず皆元気でそれぞれの思いを胸にホテルに戻る。



「伊雑宮御田植祭」参道での行列 三重県磯部町

6月25日（金）

訪日代表団の一行は東武浅草線浅草駅発の特急「りょうもう」号で群馬県の太田市へ。そこから出迎えの車で新田町総合体育文化会館へと向かった。一行は午後2時から地元のフォークダンスサークルのメンバー及び木崎音頭保存会の人たちとの共催でエアリスホール&アリーナでシンポジウム、公開レッスンを開催するための仕込みに入る。公開レッスンでは訪日代表団が扭鼓舞を、新田町側が木崎音頭を交換交流指導を行う。その後で参加者全員が輪になり木崎音頭と扭鼓舞を交互に踊る。

午後6時より新田町文化スポーツ振興事業団主催のアジア民族舞踊交流会の歓迎パーティ



学習院大学東洋文化研究所諏訪春雄教授をはさんと
常葉学園大学金兩基教授(左)と当財団大野常務理事

ィーが開催された。新田町の山崎町長始め助役、教育長、新田町文化スポーツ振興事業団の方々が大勢出席され、にぎやかな交流の宴となり楽しいひとときを過ごした。

6月26日(土)

当日朝早く東京を発った鄭明子韓国舞踊団一行を迎えて新田町総合体育文化会館エアリスホール&アリーナにて午前10時30分より本格的な公演準備の体制でリハーサルを行う。来日後初めての舞台上で訪日代表団の一行もいくらか緊張気味。午後2時からアジア民族舞踊交流会を開催。黛民族舞踊文化財団の大野常務理事、訪日代表団王恵芬団長、鄭明子韓国舞踊団鄭明子団長、高橋館長のあいさつの後開演。大盛況の中に日中韓の舞踊交流会を終え、午後6時に東京へと向かう。

6月27日(日)

学習院創立百周年記念会館における学習院大学東洋文化研究所アジア文化研究プロジェクトと黛民族舞踊文化財団との共催の交流会並びにシンポジウム会場に午前11時到着、昼食後リハーサル、午後2時より東アジア舞踊の研究会・シンポジウムに参加。

学習院大学文学部の諏訪春雄教授の司会のもとにパネラーは訪日代表団王恵芬団長、舞踊評論家如月青子先生、黛民族舞踊文化財団大野常務理事、鄭明子韓国舞踊団鄭明子団長によって

1. 各舞踊団の歴史と活動の状況
2. 今回上演される舞踊作品についての紹介
3. 民俗舞踊を現代に生かすためにどのような演出を加えているか
4. 後継者の育成と訓練の方法
5. 喜怒哀楽などの感情を表現する基本動作についての実演と説明

以上の5点についての討論がなされた。

午後4時よりアジア民族舞踊交流会

お客様も多く盛況のうちに幕を閉じた。終演後アジア文化研究プロジェクト主催の歓迎パーティーに静岡市の常葉学院大学教授金兩基先生はじめ出演者一同が参加してたいのしいひとときをすごした。

6月28日(月)

午前中、池袋の東京芸術劇場ホールで舞台仕込み開始。午後2時からリハーサルを行う。午後6時30分、中国大使館婦人部の皆様も来場され会場は満席となった。日中韓の民族舞踊が交互に演じられた。



新田町エアリスホールの体育館に於ける公開レッスン

6月29日（火）

午前9時、中国大使館の耿墨學文化参事官を表敬訪問する。訪日代表团一行は耿墨學文化参事官と石永菁二等書記官に案内されて大使館内部、庭園を散策。正面玄関で記念撮影をして別れを告げた。

午前10時30分、文化庁の林田英樹長官を表敬訪問。訪日代表团から長官に記念品の贈呈があり、記念撮影をしてから退出する。



右より林田英樹文化庁長官、東京国立文化財研究所星野紘芸能部長、当財団大野常務理事、蔣曉梅訪日代表团団員

6月30日（水）

毎朝早いので代表団のメンバーの間に少し疲れがみえてきたが、小田急線で神奈川県鶴間の大和市立保健福祉センターに午前11時40分到着。

大和地区日中友好協会田村敏子常任理事の出迎えをうける。

午後2時よりリハーサル。

午後6時30分からアジア民族舞踊交流会開演。降っていた雨も上がり、心配していたお客様も多数来ていただき会場は満席になる。日中韓の交流舞踊会の成果はすばらしく、拍手が絶えなかった。

終演後、大和地区日中友好協会の富沢篤絃会長をはじめ友好協会の歓迎夕食会に招待され、たのしいひとときをすごした。『人民中国』東京支部の人々もみえて代表団にはうれしい歓迎会となった。最終の小田急線に乗り新宿より都市センターホテルに戻る。



耿墨學文化参事官（前列中央）を表敬訪問（中国大使館正面玄関）



大和市立保健福祉センターの観客

7月1日(木)

午前9時、新宿発特急「あずさ」で長野県松本市へ。信濃路の景色は中国に似ているという。田園風景が続くからだろうか？

松本駅で(株)林友の穂刈甲子男社長の出迎えをうけ、そのまま東急インで昼食をごちそうになる。松本城、松本市内等を見学後午後4時からリハーサル。

午後6時より林友渚カナディアンホールにて松本日中友好協会による歓迎会と地元の日舞菊水流の方々との日中民族舞踊交流会を行う。中国の少数民族舞踊の公演という事で報道関係者も多数集まり、珍しい振りや、美しい色彩の民族衣裳等地元の人たちの関心を大いに集めた。



松本城を見学する訪日代表団のメンバー



穂刈甲子男林友社長と記念撮影
(松本市・林友渚カナディアンホール)

7月2日(金)

早朝、穂刈社長はじめ皆様の見送りをうけ、東京へ戻る。昼食の後、午後からディズニーランドへ。一行は午後6時から赤坂飯店で財団主催のさよならパーティーに出席。犬丸理事長のあいさつ、日中文化交流協会の矢永事務局長補佐等来賓の方々のお話のあと、矢永氏の乾杯の音頭で祝宴が始まる。中国の茅台酒なども出てお互いの記念撮影やプレゼントの交換等を行う。無事10日間の日程を終えた訪日団の一行はくつろいだ表情で新しい日本の友人たちと身振り手振りで会話交歓し、日本最後の夜を楽しんだ。「蛍の光」の曲が流れる中、参加者はそれぞれの思いを胸に会場を後にした。

7月3日(土)

訪日代表団の一行は午前中日本での買い物すませ、成田空港より帰国の途についた。

いざわのみや

伊雑宮 御田植祭 取材記

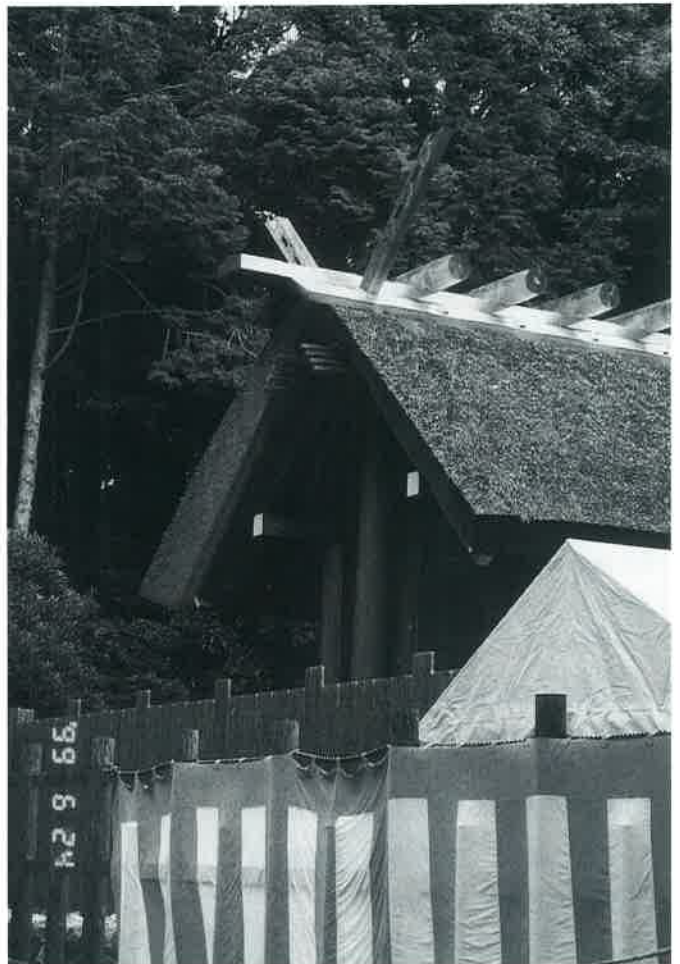
平成11年6月24日、第八次訪日代表団の王団長以下7名と国立文化財研究所芸能部長の星野紘先生他1名、黛民族舞踊文化財団の大野常務理事以下3名、通訳1名の、計13名は早朝の新幹線で出発した。三重県志摩郡磯部町上之郷の伊雑宮で行われる伊雑宮御田植祭の取材のためである。

伊雑宮は伊勢神宮の別宮で志摩一ノ宮とも呼ばれ、そこで行われる伊雑宮御田植祭は千葉県の香取神宮、大阪市の住吉大社とともに日本三大御田植祭の一つといわれる。伊雑宮御田植祭の起源は遠く神代にまでさかのぼり、「昔真名鶴磯部の千田に穂落したまつり」とあるように天照大神に供える幸を求めてきた倭姫命一行の前に白真名鶴がみごとな稲穂を落したとされる「鶴の穂落とし」の故事によるものと伝えられている。この祭りが現在の形になったのは平安時代末期か鎌倉時代初めと伝えられ、その後一時中断したが明治15年に復興、ここで毎年6月24日に行なわれている。祭式は、どんな悪条件のもとであっても、必ずこの日に行われ、第二次世界大戦末期、連日のように空襲があった時代や敗戦後の人心が荒廃している時にも絶えることなく続けられてきた。

祭りは早乙女たちの苗取りの後の竹取り神事から始まる。御料田の中に笹葉だけを残した六、七メートルの青竹（忌竹）が立ててあり、宝船の絵と「太一」と書いた大きなサシバ（大きな団扇）がその竹の上部に飾ってある。水をたたえた御料田のまわりには近郷から集まった若い漁師たちがふんどしやももひきだけの姿で待機し、合図と共に泥田の中を水しぶきをあげて突進し、青竹に飛びつく。青竹はすぐに倒され、サシバも竹も引き裂かれる。竹の倒れた方向で大漁を占うともいい、サシバや竹の割れたものを持ち帰り、神棚や船内の船霊に供える。伊雑宮は農業の神であるとともに漁業の神でもある。

竹取り神事が終わった後、御料田はもとどおりに平らにならされ、今度は古式ゆかしい装束に身を包んだ太鼓打ちや彫摺が登場し、田楽を演奏し初める。やがて菅笠、白衣、黒じゆすの帯に手甲をつけ赤いたすきがけをした早乙女6人が立人と呼ばれる介添え役の若者6人とともに現れ、笛や太鼓の囃子に合わせて苗を植えていく。これが御田植神事である。

田植えが済むと次は踊込みの行事である。立人、早乙女、囃子方、うたい手たちは御料田から上り、大勢の観衆が見守る中、伊雑宮の一の鳥居をめざして2時間かけてゆっくり練り歩く。この時は参道は人が満ち溢れ、身動き一つできないほどだった。



伊雑宮本殿

《交流会プログラム》

第一部

1. 扭鼓舞《哈尼族舞蹈》

哈尼族は雲南の南部の山地民族で、海拔1000メートルあたりの山の中腹などで生活しています。その舞踊は原始的な形態を保持しているものが多く、哈尼族の重厚で穏健沈着な民族的な性格を表しております。《扭鼓舞》は又“阿臘搓”、“托尼尼”と呼ばれ、哈尼族の支系の布孔人、切第人、阿術人の間で祭祀性と娯楽性の両方の要素を持った伝統舞踊として広く受け継がれています。小太鼓や芒、銅鑼などの楽器で伴奏され、正月や祭りの日を迎えると芒鼓の音が響き、人々はその音のもとに集まり、喜んでこの踊りを楽します。

2. 花冠舞

美しく着飾った踊り手たちが、宮廷式の華やかな衣装を身にまとい、花の冠に、ハンサン（長い袖のようなもの）を空中になびかせて、楽しく舞う踊りです。

3. 元禄花見踊り

今から約300年前、戦国の代が終わり平和な社会となるにつれ、文化も爛熟期を迎えます。四季折々自然の風物を楽しむ一般市民の情景を、春の桜を愛でる踊りに仕立てたものです。

4. 舂米歌《景頗族舞蹈》

景頗族は人口8万人あまり、主として雲南省西部の徳宏傣族景頗族自治州の海拔1500メートル前後の山地に分布し、隴川、潞西、瑞麗等に集中して住んでいます。景頗族の舞踊は潑刺としていてリズムは明快であり、豪放、朴訥、内面的な深みがあり、剛柔補い合っしてしなやかで力強いものです。《舂米歌》は景頗族の女性たちが稲の収穫の季節に脱穀のため米をつきながら歌ったり踊ったりしている楽しそうな情景を表現したもので、この舞踊は景頗族の女性たちが労働と生活を熱愛している様子をよく表現しています。

5. 妓坊舞《キバンム》

韓国の伝統的文化の形成発展において非常に重要な役割を果たした存在の一つに妓生が上げられます。妓女たちは詩歌や舞踊・伽耶琴などの諸芸に精進し、気高い心を持って貞淑な生活をおくっていたといわれています。その妓生が生活していた部屋を、教房、あるいは妓房と呼び、そこで踊られたといえます。

やさしくはかなげに見えながらも妓生独特の気高さを内に秘めた踊りといえるでしょう。

6. はねこ踊り

東北地方、現在の宮城県桃生町に伝わる「はねこ踊り」は、江戸時代（約200年～300年前）度々の凶作に見舞われ悲惨な生活を強いられた村人達が、挫けることなく村の守護神八幡大菩薩を信じ豊年を祈願し続けました。やがて豊年が巡ってきたとき村人達は感謝を込めて八幡神社に神楽を奉納し併せて田の神をも勧請し、田植えから刈り取りまで田作りの動きを表現したのが、この踊りの始まりといわれています。「はねこ」とはこの地方の方言で「はねる＝跳ぶ」「こ＝人」という意味で、跳ぶ動作が多いことからこのように名づけられたようです。

7. 五谷神《哈尼族舞蹈》

民間では五谷神（五穀の神）は“背羅神”（背負子の神）とも呼ばれています。この踊りは哈尼族の民間祭事に基づき創作された女性の一人舞であり、その内容は五谷神が人の世に幸福と吉祥を送り出す、という意味を含んでいます。

8. 小伙、四弦、馬櫻花《彝族舞蹈》

雲南省南部の険しい山中に湖面が鏡のように美しい天然の湖“異竜湖”があります。その湖の周辺で暮らしているのが支族をたくさん持つ彝族です。

舞踊《小伙、四弦、馬櫻花》は次のようなことを表しています。元気のいい活発な若者たちが愛用の四弦琴を奏でながら年に一度の“挿花節”（採花祭）にこぞって参加します。若者たちは険しい断崖絶壁に咲く“馬櫻花”を争って取り、苦心の末に花を摘むことに成功した若者は、同時に娘の思いを込めた歌声をも獲得します。そしてその時、若者と娘の心の中に愛の種が撒かれるのです。



景頗族舞蹈 舂米歌

第二部

1. 弦子舞^{シェンズーウー}《チベット族舞蹈》

チベット族は中国のチベット高原、青海省、甘肅省、四川省と雲南高原に散在しています。チベット族の人々は昔から歌や踊りが上手です。銀白色の雪山、果てしなく広がる草原、緑の樹海、そのような大自然の美しい景観がチベット族の人々の優美な舞い姿をかたち造ったのです。雲南省迪慶州^{ディンチン}に住むチベット族は美しい梅里雪山^{メイリーシュエシヤン}の麓で、焚火の傍らで故郷を賛美しながら、優美で人の心を動かす《弦子舞》を踊るのです。

“弦子”とは抒情性の強いチベット族の民間歌舞芸術です。弦子（3本弦のチベット族の楽器）を引く踊り手が舞踊を主導し、その他の踊り手は弦子の音に合わせて踊ります。

2. サルプリ舞（26日・28日・30日）

韓国の重要無形文化財第97号に指定された踊りです。

韓国の南道巫俗から派生したもので、「サルプリ」という名は、厄を除けるすなわち全ての災難を消滅させるという意味をもっています。

昔は巫女舞でしたが、後には民族舞踊に発展し、さらには、韓国舞踊の特徴である静中動、動中静の神秘的な芸術舞踊にまで高められたものです。

僧 舞（スナム）（27日・29日）

韓国重要無形文化財第27号に指定されている踊りです。

僧舞は教儀式から始まり、その後、1900年代から旧韓末才人達によって完成され、今日の形に定着したと考えられております。韓国人の美的感覚が指向し、且つ受容できる全ての粋（モツ）と魂が込められています。

動きが生きていきとし、恨と法悦の共存する感情世界が現出される踊りです。



チベット族舞蹈 鍋庄

3. ややこ踊り

民族舞踊家黛節子先生は民族舞踊を再構成した作品を数多く残されましたが、その他中世から近世にかけての芸能の復元も幾つか試みられました。「ややこ踊り」

もそうした作品の一つです。慶長時代（1596年～1615年）歌舞伎の始祖といわれている出雲の阿国が流行らせた「ややこ踊り」の復元を試みた作品です。

4. 勾 裙^{ゴウキン}《傈僳族舞蹈》

傈僳族は雲南の数多くの民族の中でも歴史の長い民族です。ほとんどが瀾滄江^{ランツァンジャン}（下流はメコン川）の河岸に住んでいて、歌や踊りが上手です。山野や峡谷、牧場、あるいは家の中などで数人から多いときは数十人、百人が老若男女を問わず集まって男女が交互に並び輪をつくって焚火を囲んで夜を徹して踊り明かします。《勾裙》は傈僳族の青年男女が恋を語るときの愛情伝達の方法を表現していてその踊りは優美で趣があり、生活の情緒が溢れています。

5. 長鼓舞（チュム）

農楽から発生した一種の踊りですが、昔、韓国人の生活は、その大部分が農耕生活でした。農業をして食生活を安定させるのが、人々の生存にとって、最も重要かつ基本的な問題でした。そのため、農民たちは、何時も暇のない忙しい生活を強いられていました。その作業を最も能率的に遂行するために、BGMとしての農楽が生まれ、その一種として長鼓舞が登場しました。この踊りは、韓国農民の祝祭には必ず登場する最も人気のある民族舞の一つであって、韓国伝来の民族楽器の一つである『チャンゴ』を肩にかけて打ちまくる多彩な音と軽快なリズムが、農民の祝祭の雰囲気を一層盛り上げることになります。

6. 祝い舞

〔花田植〕 東北・仙台の奥、秋保に伝わる民俗芸能で、豊年を願い、一心に祈りを込めて苗を植える乙女達の姿を踊りにしたものです。

〔豊年舞〕 土に生きた私達の祖先は、豊かな稔りこそこの上ない喜びだったに違いありません。その豊年を祝い祈る踊りこそ、舞踊のエネルギーの原点とも言えます。豊年の喜びを歌い上げた踊りです。

7. 鍋 庄^{ゴウズワン}《チベット族舞蹈》

“果卓”^{ゴウツォ}、“歌庄”^{ゴズワン}とも言い、焚火の側で鍋を囲み、皆でたのしみながら踊る集団舞です。これは雲南省迪慶チベット族自治州の中甸、徳欽、奔子欄一帯に伝わる独特な舞踊です。この舞踊は情緒に富み潑刺として、穏やかで重厚であり、力強く豪放であたかも大空を飛翔する一羽の鷹にも似てチベット族の人々の精神と性格を表現し、その風格と特徴を強く感じさせるものです。

8. 黒島口説《クルシマクドゥチ》

八重山群島の黒島に伝わる口説歌。島の自然の豊かさ、豊作の有様、島最大の行事である綱引き祭りや、干鰯を盗んだ鼠、それを追いかける猫など、平和な島の年中行事などを振りとともに囃したててコミカルに踊ります。

——交流会写真——



鍋庄（チベット舞蹈）王恵芬団長



鍋庄（チベット舞蹈）訪日代表団



祝い舞 黛民族舞蹈団



小伙、四弦、馬櫻花（イ族舞蹈）



はねこ踊り 黛民族舞蹈団



長鼓舞 鄭明子韓国舞踊団 鄭明子団長



花冠舞 鄭明子韓国舞踊団



妓坊舞 鄭明子韓国舞踊団



公演を終えて

EXPO'99 中国'99昆明世界園芸博覧会

ジャパンディ出演報告

1999年5月1日から10月31日まで中国雲南省昆明市で'99昆明世界園芸博覧会が開催され、日本政府も農林水産省と建設省が屋外出展をすることとなった。建設省所管の財団法人都市緑化基金が7月に日本の笛、太鼓、舞踊によるジャパンディ特別公演を担当し、黛民族舞踊団もその一部を受持つことになった。

7月17日(土)

羽田発7時15分の航空機で関西空港へ。ここで他のスタッフと合流。関西発9時40分のJ D-1233便で昆明へ。

新装なった昆明空港で雲南省舞蹈家協会の旧友たちと再会する。専用車で世博飯店へ。バイキング形式の夕食をとり昆明市での最初の夜を過ごす。

7月18日(日)

朝食をすませて日本館・ジャパンディ行事記念公演パーティーのリハーサル。

7月19日(月)

ジャパンディ本番

午前11時20分	日本庭園花の舞台に出演 「川田功子の会」(琉球舞踊) 「黛民族舞踊団」(やゝこ踊り)
午後2時	中国館屋内ステージ 「藤舎名生」(笛)「中川秀亮」(太鼓) 「林英哲」(大太鼓) 「川田功子の会」(琉球舞踊) 「黛民族舞踊団」 (祝い舞、はねこ踊り、黒島口説)
午後6時30分	ウエスティン昆明 「黛民族舞踊団」(元禄花見踊り)



'99昆明世界園芸博覧会会場 日本庭園

終演後、都市緑化基金から世博会の行事を委託された(株)大広のスタッフとウエスティン昆明で会食。その後宿舎の世博飯店に戻る。

7月20日(火)

午前11時と午後1時の2回日本庭園花の舞台で踊る。
「川田功子の会」(琉球舞踊)
「黛民族舞踊団」(やゝこ踊り、元禄花見踊り)

夜、当財団の招聘で今日迄に来日した雲南省文聯、雲南省舞蹈家協会のメンバー約60名を昆明飯店2階の東驥宮に招待して宴を開く。遠く100キロも離れた玉溪市から来た人や十数年ぶりに姿を見せた人もいてまるで大きなクラス会のような雰囲気になった。あちこちでカンペイ、カンペイ(乾杯)の声が沸き起こる。宴会は盛り上がり予定時間をはるかに越えたが、やがて楽しかった宴も終わり、車で世博飯店に戻る。

7月21日(水)

前日と同様、午前11時と午後1時の2回日本庭園花の舞台で踊る。
「川田功子の会」(琉球舞踊)
「黛民族舞踊団」(やゝこ踊り、元禄花見踊り)

夜、今度は雲南省舞蹈家協会の招待で歓迎宴。大理州(白族がいる)歌舞団団長、文山州(チワン族がいる)歌舞団団長も参加。

7月22日(木)

麗江へと旅立った琉球舞踊家の川田功子先生一行に別れを告げ、黛民族舞踊団は昆明発朝8時15分、3Q4381便で空路広州へ。3時間の休憩の後広州発14時35分P234便で関西空港へ、さらに関西発20時50分J D516便で羽田空港へと向かう。定刻より少し遅れて23時に羽田到着。夜遅くなったのでさよならのあいさつもそこそこに皆家路を急いだ。小道具、衣裳類は昆明から別便で出したので若干のトラブルがあり、赤坂の事務所に着いたのはひと月後のことになった。



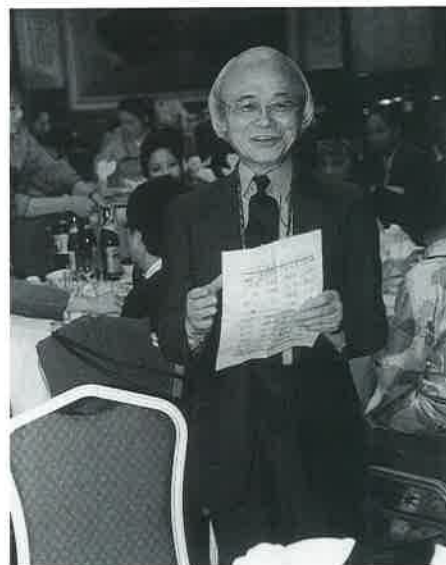
日本庭園「花の舞台」で踊る黛民族舞踊団



左より林英哲先生(大太鼓)、藤舎名生先生(笛)



雲南省社会科学界联合会 趙紹敏主席



黛民族舞踊文化財団 大野晃常務理事



ジャバンディのレセプション (ウエスティン昆明)



穂花(琉球舞踊) 川田功子の会

第1回訪中国の思い出

今回、今までに来日された雲南省文聯の幹部や雲南省舞蹈家協会の舞踊家の方々を昆明飯店に招待したとき、いくつかの思い出が私の胸によみがえってきた。

日本中国文化交流協会の招請で「中国文学芸術界聯合会」代表団の一員として昭和59年（1984年）来日した昆明の舞踊家周培武先生一行が黛スタジオを訪れて前理事長黛節子先生とはじめて日本の民族舞踊と中国舞踊の交換会をしたときのことである。訪日された方々は大喜びで前理事長と談笑していたが、その時、周先生は「来年中国の奥地（昆明）にいらっしゃい。こちらから手紙をあげますよ、きっとね。」と言われ固い握手をされてお別れした。それから1年近く、待てど暮らせど便りは来ない、今のようにFAXはなく、航空便でも昆明まで半月もかかっていた時代だ。ある日、待ちに待った「手紙」が来た。それは「待ってます、踊りにいらっしゃい」との内容であった。前理事長といろいろ話し合ったあげく行くことに決定。しかしいざ出かけるとなると「衣裳、小道具はどうやって運んだらいいの?」「途中で飛行機が落ちたらどうしよう」などと次から次へと疑問がわき、さんざん悩んだあげく日本中国文化交流協会の白土専務様のお力ぞえを得てやっと出発。アメリカやサウジアラビアでは踊ってきたものの中国は始めてで何もわからない状態のまま香港へ、右往左往したあげく中国民航の航空機に乗ってやっとのことで昆明に着いた。

昆明の土地を一步ふみしめた時、私は先生と抱き合って喜んだ。その時の感激は終生忘れることができない。先生は「やっと着いたよ」「とうとう来たよ」と子供のように何回もおっしゃった。その様子は今も私の心につよく残っている。

空港には周先生、劉金吾先生、刀美蘭先生の出迎えの姿があった。それから雲南省での第一回の訪中国のスケジュールがはじまった。何から何まで、新しい事だらけで、何がなんだかかわからず無我夢中に日を過ごした。いろいろな少数民族との踊りを通じての交流に10日間はあっというまに過ぎ去り、使命を終えて無事に日本に帰ることができた。日本へのおみやげは雲南省舞蹈家協会との間の隔年交流の約束だった。

その時に私は思った。「民族舞踊を通じての友好とはなんだろう? 何をおいても踊りに次ぐ踊り、踊りで明けくれ踊りに埋まる事が出来る時こそが舞踊家の生き甲斐であり、その時にこそ舞踊家としてのほこりにみちた人間になれるのではないだろうか? 民族舞踊の交流が私たちと雲南省の舞踊家たちとをつよく結びつけた。」と…。

前理事長の芸術に対する責任ある真剣な追求、精神と民族の伝統文化への深い愛情という教えをいつまでもまもりつづければならない。

隔年交流を約して15年、私達は今後も交流をつづけて行きたいと思う。

黛 莉香

第8回国際交流のつどいに参加

黛民族舞踊団は11月15日に杉並区立産業商工会館において財団法人杉並区国際交流協会の主催で行われた「第8回国際交流のつどい」に賛助出演し、「伊予万才」「越中おわら」を披露し、同時に雲南省少数民族の紹介をした。



杉並区立産業商工会館にて

ジノー族文化伝習館建設へ

ジノー族は中国雲南省シーサンパンナの基諾山（攸楽山）周辺に居住し、人口は1万人余り、固有の言語を持つが文字はなく通常は漢字を使用する。祖先崇拜が盛んで山川草木皆靈魂を持つと信じている。父系制の大家族で家族全員が大きな竹樓（竹製の高床式住居）に住んでいたが、最近は核家族化が進み、分居して家計も別にする事が多くなったという。

ジノー族は主として農業に従事し、茶をよく生産する。子供のころより歌うことを学び、即興で曲に合わせて詞をつくり祭日には年長者は歌を歌い、若者は心の赴くままに舞いを舞う。

黛民族舞踊文化財団の黛節子前理事長がジノー族に最初に逢ったのは1985年4月シーサンパンナの水かけ祭りの時だった。この時シーサンパンナは毎日気温が38度を越えていた。そこに春節の休みにジノー族の若者が山から降りてきて、黛前理事長一行にジノー族の大鼓舞を教えてくれた。

二度目は稽古をするためジノー族の村を訪問した。ジノー族の村を訪れたのはこの時が初めてである。

黛前理事長はとりわけジノー族に対して深い愛情を注ぎ、1989年9月には文化庁主催の芸術祭前夜祭に国立劇場の大劇場で日本に持ち帰ったジノー族の踊りを日本の観客に紹介した。そして1991年5月に三度目の訪問を行う。この時にはほとんどの村人たちが見守る中、村の中央広場で「はねこ踊り」等日本の民族舞踊を披露した。ジノー族も「竹筒舞」等村に伝わる伝統舞踊を何曲も踊ってくれた。

すでに述べたようにジノー族は雲南省シーサンパンナの山間部に住み、固有の文化を持つ少数民族であるが、近年、経済流通が進展し、漢文化が浸透してくる中で次第にそれらの影響を受け、民族としてのアイデンティティーを失いつつある。このような状況に危機感を持ったジノー郷政府や知識人たちは何とかジノー族の文化を後世に伝えることはできないかと考えた末、ジノー族の村に文化伝習館をつくることを思いついた。そこでは村の古老たちが若者たちに古来から伝えられてきたジノー族の歌や舞踊、機織物、刺繍、建築技法、料理などを教え、ジノー族の伝統文化がそれら若者たちにより保存されていく。その一方で文化伝習館自体がその周辺の環境を含めて観光資源となりジノー族の村を潤すことになる。ただ資金面で思うに任せずこの計画は宙に浮いたままだった。

黛前理事長がジノー族の村を訪問したときの通訳を務めた雲南民族博物館の尹紹亭副館長からこの話を聞いた当財団の大野常務理事は早速理事会にはかり、財団としてもジノー族文化伝習館建設に協力する方向で理事会の承諾を得ることができた。昨年7月には昆明市で尹紹亭氏と大野常務理事が会見し、財団が建設資金の一部を寄付することが決定した。現在いくつかの案が検討され、今年度中にはその文化伝習館が黛前理事長の愛した村に姿を現す予定である。



ジノー族文化伝習館建設予定地

雲南航空国際旅行社訪日

私達が訪中した時いつもいつも親切なガイドをしてくださる雲南国際航空旅行社の劉堅敏社長他、以下のメンバーが12月19日から訪日。黛民族舞踊文化財団でも一行の仕事の合間を見て大野常務理事が食事に招待、日本のおみやげも託して日本での活躍を祝った。また一行の来日目的の一助にと、当財団と親交のある日本の旅行社を紹介した。

雲南航空国際旅行社訪日名簿

劉 堅 敏	男	雲南航空国際旅行社社長
楊 進	男	雲南航空国際旅行社副社長
劉 堅 立	男	雲南航空国際旅行社日本部外聯部部長
聶 華	男	雲南航空国際旅行社日本部部長
範 埝	女	昆明飯店社長
李 松 涛	女	昆明飯店営業部

2000年5月31日～6月10日 舞民族舞踊団第6次訪中団
中国昆明・麗江・迪慶州中甸で日中舞踊交流の予定



帰化寺（中甸のラマ教寺院）『人民中国』より

財団法人

舞民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人舞民族舞踊文化財団は、我が国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡業公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者（音楽、振付けを含む）、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および中国・韓国・東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し、将来は資料館を設立して一般の利用に供することを計画していま

す、また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護の元に活動していますが、これらの舞踊団との交流や、中国・韓国・東南アジア諸国の民族芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民族芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申ししましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育てまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます。

民族舞踊文化 NO.12

2000年5月15日発行 発行人 犬丸 直 編集人 大野 晃

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 舞ビル4F Tel 03-3583-3633 (代)
Fax 03-3583-3639

財団法人 舞民族舞踊文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO